



Title	1950年代の丹下健三の著作にみる伝統論の変遷
Author(s)	羽藤, 広輔
Citation	デザイン理論. 2026, 87, p. 108-109
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/103734
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

1950年代の丹下健三の著作にみる伝統論の変遷

羽藤 広輔 信州大学

研究の目的と背景

本研究は、1950年代の丹下健三の著作にみる伝統論の変遷について明らかにするものである。

まず1950年代の伝統論争の概要¹についてであるが、同論争は、主に、川添登が編集長を務めた『新建築』誌において展開されたものであり、丹下の作品と論考が掲載された1955年1月号を境に議論が活発化したと考えられている。その代表的な著作とみなされているのが「現在日本において近代建築をいかに理解するか：伝統の創造のために」（『新建築』1955年1月号／以下、55年1月論文）と「現代建築の創造と日本建築の伝統」（『新建築』1956年6月号／以下、56年6月論文）であり、丹下の建築表現論が伝統との関連の中で語られた。

その他、多くの建築家や評論家によって論争が展開される中、新たな視点を提示したのが、『新建築』1956年8月号の白井晟一による「縄文的なるもの」であり、白井は、縄文・弥生の対比による伝統理解の構図を示した上で、江川氏旧葦山館を「縄文的なポテンシャルを感じさせるめずらしい遺構」として評価した。後に、丹下が「弥生的なもの」と「縄文的なもの」の関係から伝統を捉えようとしたのが、1960年の写真集『桂 日本建築における伝統と創造』に掲載された論考「日本建築における伝統と創造－桂」（以下、『桂』論文）であり、岡本太郎や白井晟一の影響が指摘されてきた²。

以上のような論争は、1955年1月から2年程続いて、次第に収束していった。後年、同論争では、

戦前からの伝統理解が基礎となったが、他に、「民衆」の視座への共感）、〈「空間」による伝統の把握〉、〈「縄文的なもの」への関心〉が新たに登場したと総括されている³。

また、丹下の伝統論について、弁証法的な創造論や、揺れ動いた桂離宮への評価等、これまで度々取り上げられてきたが、公刊された1950年代の丹下の言説を網羅的に取り上げ、伝統論の展開を詳細に検討した研究は報告されていない。

言説の系統的整理

本研究では、1950年1月から59年12月までの期間に発表され、丹下個人の記名のある112件の著作を分析対象とした。次に、対象とした資料から、伝統論に該当する言説を、引用文として合計118件、抽出した。さらに、抽出した引用文についてその論旨ごとに分類した結果、43の論旨に分類する事ができた。

事例数として最も多かったのが、〈伝統と技術／ソシアル・リアリズムとモダニズムによる対比的理解〉であり、主に1950年代の前半に見られ、丹下の弁証法的伝統論の端緒となった。それに次ぐ〈対決し克服すべきもの〉としての伝統理解は、逆に1950年代後半に見られ、丹下の同時期における伝統に対する基本的な姿勢として理解できる。その他、〈形式的な伝統表現の否定〉は、伝統的なものを内容への評価なく形だけで取り入れることを批判したものであり、比較的、時期の偏りなく見られた論旨であるが、他の建築家にも多く見られるものであり、同時代の建築家に共有された基

本的な考え方と言える。また、桂離宮に関連して、〈身辺的認識からでた「生活の知恵」の否定〉、〈自然に対抗する人間の意志〉の重視も多く見られたが、これについては、時期的に変化の見られた論旨であり、次項で検討する。逆に事例の少なかったもので注目されるのが、〈精神ではなく表現〉である。55年1月論文の言説であり、当時の丹下の建築作品を見ても理解しやすい論旨であるが、その他の機会ではほとんど見られなかった。また、丹下の伝統表現において関連が深いと見られてきた〈空間による伝統の把握（空間の無限定性）〉に関する言及も、事例数としては少なかった。以降、その主張に注目すべき変化が見られた論題について、それぞれの論旨の変遷を明らかにする。

1950年代の丹下健三の伝統論の変遷

まず、二項対立的な状況理解に基づく弁証法的創造論は、1950年代を通して見られ、1955年11月の「建築と現代芸術」では、表裏一体の、伝統と創造、民衆と作家という関係に整理されたが、1960年の『桂』論文では、上層の文化と民衆の文化、弥生的なものと同文的なもの、伝統と破壊という形を取り、自身を重ね合わせる対象が、民衆の側にシフトした。

その民衆の捉え方の変化を辿ってみると、『新建築』および『建築文化』1956年10月号の2論考において、それまでの内的な自己と外的な民衆の統一という弁証法的論旨に、民衆を創造の主体と位置付け、そこに建築家が参画するという捉え方が加わった。

一方、桂論の変遷に着目してみると、『桂』論文に特徴的な言説とみなされてきた、上層文化と民衆文化の交錯から桂離宮を捉える論旨は、既に『建築文化』1955年8月号の論考に見られ（同様の論旨が『新建築』1955年2月号の池辺陽の論考に見られ、影響の可能性が指摘できる⁴⁾、また、その対比に「弥生」と「縄文」を関係づける言説は、白井の「縄文的なるもの」に先立つ、56年6月論文

に見られた。

そうした中、ワビ・サビ的な消極的伝統観の否定やそれを打ち破るために自然に対抗する人間の力強い意志を重視する桂批判の主張が変化していくきっかけとなったと考えられるのが、その論理基盤としての「生活の知恵」なる概念の変化であり、それまで「身辺的」として否定的に用いられたものが、56年6月論文では、典型化の過程の描写と重なりながら「健康な生活の知恵」として肯定的に扱われた。これと同様な、「生活の知恵」の肯定的言及は『みづゑ』1956年5月号におけるイサム・ノグチとの対談でも見られたことから、同対談が、丹下の桂論変化における1つの分岐点となった可能性がある。

さらに、民衆の捉え方に変化が見られた前述の2論考では、「生活の知恵」の肯定的言及も見られることから、この2論考が丹下桂論の変化に大きく関わったと考えられ、もう1つの分岐点として指摘できる。

謝辞

本研究はJSPS科研費JP23K00174の助成を受けたものである。また、資料収集において箱崎瑞穂氏の協力を得た。ここに記して謝意を表したい。

参考文献

- 1 羽藤広輔「建築家・白井晟一の著作にみる伝統論」日本建築学会計画系論文集、第80巻、第712号、2015.6、pp.1411-1418
- 2 門脇稔・田路貴浩「丹下健三の伝統論 その2」日本建築学会大会学術講演梗概集、F-2、2008.7、pp.683-684
- 3 藤岡洋保「伝統論争の歴史」『建築20世紀PART2』新建築社、1991、p.78
- 4 酒井禄也・羽藤広輔「1950年代の池辺陽の著作にみる伝統論」日本インテリア学会論文報告集、第31号、2021.3、pp.101-108